

# ムスリム NGO の理念と活動

——パキスタンとトルコの事例から——

子 島 進

ダニシマズ・イディリス

## はじめに

日本中東学会の第28回年次大会は、2012年5月12日（土）、13日（日）の両日、東洋大学白山キャンパスにおいて開催された。本稿は、その際に実施された「公開イベント：シンポジウム」の第1部：「ムスリム NGO の理念と活動」をまとめたものである。このシンポジウムでは、子島進（東洋大）が司会を担当し、子島、細谷幸子（東邦大学）、そしてダニシマズ・イディリス（同志社大学）の3名が報告を行った。なお、細谷がその後イギリスに留学し、執筆に参加できない状況のため、本稿は子島とイディリスの共著となっている（細谷報告については、細谷2011を参照されたい）。

日本中東学会の初日公開イベントは、例年、開催校に関連するテーマを扱う。今回は、二部構成のシンポジウム開催となった（第2部は、学祖井上円了にちなんだ「イスラームの怪異」）。第1部では、イスラーム圏において、信仰に根差しつつ社会的な活動を展開する3つのFBNGO（Faith Based NGO）を取り上げた。イスラームの特徴の一つとして「精神的な側面ばかりでなく、広く深く信者の社会生活に根をおろしている」点が挙げられるが、具体的に社会問題に取り組む NGO の活動とイスラーム的な価値観に接近していくことを試みた。ムスリムが行っているボランティア／NGO 活動については、日本ではこれまであまり情報を得られない状況が続いてきた。しかしながら、実際に

は、スラムにおける学校やクリニックの運営といった草の根レベルの活動から、全国的な規模での環境問題への取り組み、さらには積極的に国際協力（緊急救援）に従事するものなど、多様な活動の展開を見ることができる。とりわけ今世紀に入って以降、多くの研究者がムスリムの NGO に注目するようになり、地道なフィールドワークの成果が発表されてきた。

シンポジウムで取り上げたのは、以下の3団体である。

ハムダルド財団（パキスタン／発表：子島進）は「人類への奉仕を通して、神に仕える」をモットーとする。20世紀初頭にデリーで開業した薬屋に、その歴史は始まる。その後、インドにおいて医学と教育分野において活躍する NGO へと成長する。パキスタンにおいても、分離独立に際して、カラーチーへ移住したムハンマド・サイード氏が新たに創設した（1964年に団体登録）。パキスタンでは老舗の NGO として知られており、現在、娘のサディア・ラシード氏がその運営にあたっている。この財団の特徴は、ユナーニー医学に基づく数百種類の薬を製造・販売するハムダルド製薬を、利益をもたらずワクフ財源としていることである。製薬会社の純益を、ハムダルド財団が管理・運用し、公共の福祉（具体的にはユナーニー医薬産業の発展と教育）に充当する。寄付に一切依存することなく、自前の財源で活動を展開している。

キャハリーザク介護施設（イラン／発表：細

谷幸子)は、中東で最大規模の介護福祉施設である。運営費用は年間約12億円、1700人の入所者(高齢者・障害者・難病患者)に対し、900人の有給スタッフと多数のボランティアが介護にあたっている。運営費の8割が一般からの寄付であり、この中には多額のザカートやサダカが含まれている。また、シーア派イマームへの「願掛け」のお礼奉公として、定期的に施設に通う多くのボランティアが見いだされることが特徴的である。

近年、国外での支援活動に従事する、いわゆる国際 NGO がイスラーム圏でも増加している。特に注目すべきは、トルコとマレーシアの動向であろう。今回は、トルコを代表する国際 NGO の一つであるキムセ・ヨク・ム(報告:ダニシマズ・イディリス)を取り上げた。この団体の名称は、トルコ語で「誰か助けてくれないか」あるいは「そこに誰かいないか」という救援現場でのかけ声に由来する。1999年、テレビ報道の一環として始まった活動であり、2004年にテレビ局から独立して協会化された。同年より海外活動を開始(インドネシアのバリ島やパキスタン)し、2010年には国連経済社会理事会の協議資格を取得している。トルコのイスラーム思想家、F.ギュレンの影響を受けたギュレン運動の一環として知られている。近年、この運動に関わる人々は、(個人名ではなく)トルコ語で「奉仕」を意味する「ヒズメット運動」と呼ぶようになってきた。ここでの奉仕は神に対するものであり、先のハムダルドのモットーと共通するものである。東日本大震災に際して、キムセ・ヨク・ムは地震発生2日後には先遣隊が現地入りした。その後、在日トルコ人と連携し、支援物資の提供やトルコ料理の炊き出しを行った。

今後、イスラーム発の FBNGO の重要性は、国際社会においてさらに増していくものと考えられる。これらの NGO を導いている理念、イスラーム的慈善制度の活用、そして活動の実際について検討を深めていくことが、異文化理解の

観点からも相互支援という実務上の観点からも重要となろう。さらに、東日本大震災に際して被災地に駆け付けたキムセ・ヨク・ムの事例は、単に研究にとどまらず、NGO がもつ「ともに支えあって生きる同時代人の営為」としての側面にも、注意を喚起するきっかけとなることが期待される。

## 1. ハムダルド財団

本章の前半では、まずイスラームにおける「助けあいの精神」を取り上げる。後半では、ハムダルド財団の事例を提供する。

### 1.1 助けあいの精神

子島は、パキスタンやインドで、ムスリム NGO の調査・研究をおこなってきた。1993年から95年にかけて、パキスタン北部でアーガー・ハーン財団とイスマール派コミュニティの調査に従事し、博士論文として刊行した(子島2002a)。現在、パキスタン、インド、それに東南アジアや中東も視野に入れたムスリム NGO の比較研究を進めている。子島が研究の当初から関わってきたパキスタンでは、特に政治的な安定という面からは思わしくない状況が続いている。実際、「政治家は腐敗している。民族同士の争いも絶えない。将来に希望がもてない」という声を、パキスタンに行くとよく聞かされる。しかしながら、日本において、パキスタン理解のキーワードが「テロ」というネガティブな言葉に還元されていくことに対しては、強い違和感を覚えている。厳しい時代状況だからこそ、地道に活動する NGO 活動に焦点を当てて、そこで発揮されている「助けあいの精神」について語ることは重要であろう。

では、ムスリム社会における「助けあいの精神」とは、具体的にどのようなものを指すのだろうか。まず、イスラームとはアラビア語で「アッラーに帰依する、服従する」という意味であるが、人と人との助けあいも、神が命じていることを確認したい。NGO やボランティ

ア研究の観点からも重要なのは、五行と呼ばれる基本的な宗教的義務—これらは善い行いであるから実行しなさいと神が命じている—に、喜捨が含まれている点である（その他は、信仰告白、礼拝、断食、巡礼）。「稼いだお金を、神に返しなさい」という命令であるが、それが貧しい人や、宗教のために働いている人のところへ行くというものである。責務としての喜捨は「ザカート」であるが、自発的に行う「サダカ」もある。さらに、ムスリム社会に広く見られるワクフも、慈善を恒久的に行うための仕組みとなっている。このように貧しい人、困っている人を助けることが神の求める善行であり、かつその善行に対する究極の報奨として天国があることが、広く社会的に共有されている。

もちろん、それで社会問題がすべて解決するわけではないが、「慈善の精神」、「助けあいの精神」がムスリムの価値観に深く染み込んでいることを確認したい。このような視点をとるとき、ボランティア精神の発動、社会的弱者に対するサービスの提供、さらに喜捨やワクフによる資金の確保といった観点から、ムスリムの NGO を見て行くことが可能となる。引き続きパキスタンからの事例として、ハムダルド財団について述べることにしたい。同財団は、エディー財団、アーガー・ハーン財団などと並び、全国的な知名度を有する NGO の一つである（子島2002b）。

## 1.2 歴史と活動（子島2004, 2011）

ハムダルドにおいては、イスラームの慈善の精神を制度化したワクフとイスラームの伝統医学である「ユナーニー」が密接に関連しあっている。ユナーニーの製薬会社「ハムダルド製薬」が生み出す利益を財源とすることで、外部資金に頼らずに、貧困地区での医療奉仕、総合大学の建設、医学やイスラーム学関係の学術雑誌や書籍の編集・発行、ユナーニーに関する国際会議の開催等の多岐にわたる活動を展開している。



写真1 広大な敷地をもつハムダルド大学。  
2012年1月23日

20世紀初頭に開店したデリーの小さな薬局に始まるハムダルドの歴史は、当初インドをその舞台とした。若くして逝去した父の事業を、長男が引き継ぐ一方で、ムスリムが樹立した新国家へと渡った弟のムハンマド・サイードが、以下に紹介するハムダルドをパキスタンで一から創りあげた。ムハンマド・サイードは、当初たいへんな苦労を重ねるが、早くも1953年にはハムダルド製薬パキスタンをワクフとしている。このとき、利益の75パーセントをワクフ財源に充当することを宣言した（その後1983年に、会社の純益のすべてを公共の福祉に役立てると、ワクフ文書を改訂。Said 2003）。

当初、ハムダルドの社会貢献事業は、インドでもパキスタンでも、個人と企業の境界が曖昧なまま行われていたようだが、やがて事業内容と財政の両面から、個人の手には負えないほどに拡大していく（Razack 1964）。1964年、両国においてハムダルド財団が設立される。ハムダルド製薬のもたらす収益を「財源」とし、それを基金としてハムダルド財団が大学や病院等の「施設」を建設していくスタイルが確立されたのである。伝統的なワクフでは、財源と施設は恒久的なセットになっているが、ここで財団が計画的に新たな事業を展開していくことが可能となった。

以下は、ムハンマド・サイードが、ワクフ設

定から四半世紀の間に、作り上げた組織と活動内容である。25周年時の資料 (Hamdard Foudandation n. d.) から見ていきたい (財団設立60周年を記念して、現在、新たな文書資料の出版を準備中とのことである)。

まず、その目的であるが「ハムダルト製薬からのワクフ資金を活用した慈善活動」、すなわちパキスタンの市民を対象として、知識と教育の向上、貧困の緩和、弱者支援に従事することを謳っている。この目的は、東洋医学 (Eastern Medicine) の発展を通して目指されている。ここで言う東洋医学とは、漢方やアーユルヴェーダを含む広い概念であり、ユナーニーはその下位分野を形成するものと位置付けられている。東洋医学促進協会 (1956年設立)、東洋医学アカデミー (1958年)、東洋医学調査研究所 (1966年)、パキスタン東洋医学協会 (1975年) などの組織が次々に立ちあげられていった。実際に調査研究の対象となり、また医学として実践されているのはユナーニーが主体であり、東洋医学とユナーニーはほぼ同義語として使われている。しかし、さまざまな伝統医学の長所を取り入れようとする姿勢を表明し、イスラームだけを排他的に取りあげているわけではない点を確認しておきたい。

医療面では、大学病院を拠点とする活動を展開している。ユナーニーの近代化を図る一方で、貧しい人々を対象とするクリニックや巡回診療車による医療奉仕を行っている。巡回診療の活動は1963年に開始され、現在ではパキスタンの多くの都市に活動を広げている。年間40万人を越える人々を診察し、薬を施している。

1961年に開始され、国内各地で活発に行われたのが「ハムダルトの夕べ」である。この活動は、建国時の熱気が冷め、パキスタンへの幻滅の広がる状況において、知的な活性化を目指すものとなった。カラッチ、ラーホール、さらには東パキスタンのダカにおいても開催された。上記の報告書からは、20年にわたって宗教、人文社会、科学、時事問題に関するさまざまな



写真2 スラムを巡回する診療車。2004年9月20日

話題を、500名を超える演者が提供したことがわかる。

出版分野にも、ハムダルト財団は力を傾注してきた。児童雑誌や子供向けの読み物を発行するとともに、医学や健康分野、イスラーム学の雑誌を定期的に刊行している。ムハンマド・サイードは、1931年にデリーで創刊されたウルドゥー語の健康雑誌 (Hamdard-i-Sehat) をパキスタンでも継続。1970年代後半には、Hamdard Medicus (1977年)、Hamdard Islamicus (1978年) といった英文の学術雑誌の刊行も開始した。

このようなハムダルトの医療・教育・文化的な活動は、その後、1983年に開始される学園都市建設として結実する。カラッチ郊外の広大な敷地に、ハムダルト大学や医学カレッジ、病院、薬草を栽培する農園、近隣農村の子供たちを無料で教育する小学校などを配置。ハムダルト大学の医学部・薬学部では、近代的なイスラーム医学の発展を担うべき男性ならびに女性の医師や薬剤師を養成している。また、ユナーニーを発展させるためには、常に新しい知識の吸収が必要であるとの認識から、積極的に学生や教官を留学に送り出している。送り先は日本、ドイツ、アメリカ、カナダ等である。

この学園都市の中核に位置する図書館を、イスラームの黄金時代を象徴するとされる「知恵の館」Bait al-Hikmah と名付けたところに、彼らの意欲がうかがえよう。「知恵の館」は、アッ

バース朝のカリフによってバグダードに設立された学術研究所である。ギリシアの哲学・科学文献の収集・研究とそのアラビア語への翻訳を主たる目的とし、図書館と天文台が付置されていた。

最後に、ワクフを現代において活性化させるべく、ハムダルド財団が本拠地カラチーで1988年に開催した International Seminar on The Place of Waqf in Islam におけるムハンマド・サイードの演説を見ておきたい。

信仰とは、全能のアッラーがお喜びになることの探究であります。人は高貴な行いによって、神から恩恵を授けられるのです。神の道のために役立つお金の使いみちとして、ワクフは最善のものです。その報奨は、現世と来世にわたり、アッラーの祝福は復活の日に至るまでつづくのです (Said n. d.)。

ここに、先述した「善行とそれに対する神からの報奨」という価値観を再確認することができる。

## 2. キムセ・ヨク・ム

ここからは、キムセ・ヨク・ムが東日本大震災に際して行った支援活動について述べる。

キムセ・ヨク・ムは、3月11日に東日本において大型地震が発生したという情報を得ると、ただちに先遣隊を日本に送った。翌日には東京に到着、13日には被災地に入った。災害の大きさとニーズを自分たちの目で確認すると、ただちにトルコにおいて支援キャンペーンを開始し、日本では在日トルコ人と支援チームを結成した。ギュレン運動に参加する人々の精神的拠り所でもあるギュレンその人も、「これまでにトルコで起きた災害に際して、見返りを求めることなく支援をしてくれた日本を、今度は私たちが支援しよう」と人々を鼓舞した。集められた義捐金は、この支援チーム<sup>(1)</sup>に託され、物資の買い入れと被災者への配布に充当された。支

援活動は、キムセ・ヨク・ムの資金援助と在日トルコ人のボランティアで実現したものである(筆者のイディリスも、自らボランティアとして参加した)。

その活動は、1) 支援物資の配給、2) トルコ料理の炊き出しの二種類に大別できる。さらに、被災した女性や子供たちが東京や大阪等の遠隔地に避難する際にも支援した。

### 2.1 支援物資の配給と炊き出し

支援する地域と活動内容は、宮城県庁や仙台市に設置された支援物資管理室と危機管理室からの情報と指示に従うこととなった。管理室との連絡は仙台在住のトルコ人が担当した。最初の情報は、水や食品が求められているというものだった。当初、東京でトラックと物資を調達しようとしたがかなわず、結局、名古屋でトラックを手配した。物資は名古屋だけでは大量に調達することができず、さらに大阪在住のトルコ人の協力を得ることとなった。一連の活動は、すべて支援チームのボランティアによって実行された。4回にわたる活動は表1にまとめた。このときの支援物資は約40種類にわたり、その内訳は下のとおりである。

食料：水、紅茶、牛乳、ペットボトル飲料、フルーツジュース、ヨーグルト、果物(オレンジ、リンゴ、バナナ、イチゴ)、ビスケット、ラーメン、数種の缶詰、インスタントカレー、マカロニ、オリーブオイル、ベビーフード、米、卵、チョコレート、パン、インスタントライス、ミルクパウダー。

日用品：ティッシュ、ウエットティッシュ、ペーパーナフキン、紙コップ、箸、子供用紙おむつ、女性用品、電池、ロウソク、トイレトペーパー、歯ブラシ、歯磨き粉、カセットコンロのガスボンベ、ドライシャンプー、体を拭くためのウエットティッシュ、男女用下着。

第1、第2便では主として食料を送ったが、

次第にニーズが変わり、第3便には日用品を多く含んでいた。第4便は、特別に求められた水を提供した。その後、宮城県の危機担当役員との話し合いの結果、温かい食事の必要性が認められた。東京の在日トルコ商工会議所ならびにレシャット・レストランの協力のもと、3回の炊き出しを実施した（表2）。4月の段階で、山元町の2つの避難所で1400人分の食事（レンズマメのスープ、肉の炒め物、ピラフ、サラダ、

デザート、ジュース）を提供した（イディリス2012）。

### 2.3 日本人の反応

今回の支援活動は、避難所の被災者にも評価され、トルコおよび日本のメディアにも取り上げられた。とりわけ温かいトルコ料理の炊き出しには、多くの被災者は興奮と喜びを隠しきれない様子であった。支援物資を届けた石巻市か

表1 東日本大震災に際しての支援物資の配給（ダニシマズ・イディリス作成）

活動日	支援先
3月20日	仙台市：仙台徳州会病院、仙台イスラーム文化センター、特別養護老人ホーム萩の風、避難所（名称不明）など。 岩沼市：立岩沼小学校の避難所。
3月23日	石巻市：鹿又在住のトルコ人家族ジェンギズさんとその隣人、住吉小学校、ならびに中学校の避難所、大瓜井内区と井内西部区の自宅避難者の支援センター。
4月3日	気仙沼市 四反田の青果市場に設置された支援物資収集センター。
4月7日	宮城県本吉郡南三陸町、志津川小学校の避難所

表2 東日本大震災に際しての炊き出し（ダニシマズ・イディリス作成）

実施日	場所	配布者数	提供者・協力者
4月13日	山元町、中央公民館	700人	KYM+Nittokai, 在日トルコ人のボランティア
4月14日	山元町、山下中学校	700人	KYM+Nittokai在日トルコ人のボランティア
5月14日	亘理町、亘理小学校		KYM+Nittokai, トルコ大使館, 在日トルコ商工会議所



写真3 山下中学校（宮城県山元町）でのトルコ料理の炊き出し。中央が筆者のダニシマズ・イディリス。2011年4月14日



写真4 支援物資を自衛隊に手渡す。宮城県気仙沼市。2011年4月3日

らは、後日支援チームに手紙が送られてきた。大瓜井内区の区長奥山仁太郎氏と井内西部区の区長の宮本孝太郎氏からのものである手紙には次のように書かれていた。

このたびの大災害で、貴重な生活用品をたくさんいただきまして、本当にありがとうございました。道路、電気、ガス、水道等のライフラインがすべて寸断され、発生から10日以上もたった23日、私たち、自宅避難者（約70世帯200人）の食料品も絶え、究極の状態でした。そこへ、丁度、トルコの皆様がトラックで貴重な生活物資をたくさん届けて下さいました。夢のようで、感無量でした。もっとも欲しかったパンや水などの食料品はじめ、生活用品はなによりのものでした。地区住民は皆大変喜んでおります。心からお礼申し上げます（2011.3.29）。

河北新報（2011年4月14日朝刊）に掲載された山元町での炊き出しの記事には、次のような感想が掲載された。「栄養バランスがよく、新鮮な味わい。ありがたかった。」毎日新聞は、宮城県における在日トルコ人による炊き出しを記事にした（2011年4月27日朝刊）。そして、その動機を、1999年にトルコで起こった巨大地震の際に、日本から送られた援助への「恩返し」として紹介した。筆者自身は、支援活動は恩を返すためでも、将来お返しをしてもらうためのものでもないと思っている。他のトルコ人ボランティアにも確認したのだが「すべては神のご満悦のため。それが得られるもっとも確実な方法の一つが、神が創造したもっともすばらしい存在である人類のために奉仕することだ」という返事が多かった。これは、すでに述べたとおりヒズメット運動の核心にある理念である。しかしながら、トルコと日本の間に、相互支援の歴史があることは周知の事実である。また、それ故にトルコ人が日本を友好国とみなしていることも確かである。日本のメディアにとって

（ひいては一般読者にとっても）、「日本への恩返し」は、今回の支援活動の説明としてわかりやすいものだっただろう。

### 3. 結論と今後の展望

本稿では、イスラーム的な価値観に則った2つの NGO を紹介した。最後に、イスラーム圏の FBNGO について、3つの観点から論じてみたい。

まず、このカテゴリーに属する団体は、当然のことながら慈善の傾向が強い。「魚の採り方」を教えるのではなく、目の前で困っている人には「はい、どうぞ」と魚をあげる。ゆえに一般庶民の受けもいいと言える。ハムダルドによる無料診療は、その典型例であろう。しかしながら、慈善の精神はそのままに、NGO としてのプロフェッショナル化を目指す際の過程—住民参加やエンパワーメントという概念を取り込んでいく過程—は、どのようなものとなりうるのだろうか。宗教的な慈善のもつポテンシャルを考えるうえで重要な課題であろう。

イスラーム圏における「セクラーな NGO」についても、補足的に言及しておきたい。と言うのも、ここで取り上げた FBNGO が、イスラーム圏において数の面で優勢であるというわけではないからである。むしろ、リベラルでセクラーな姿勢を標榜する NGO が多いように思われる。そして、パキスタンでもトルコでも、イスラームとセクラーな勢力の間に、緊張・対立が折りにつけ生じている。しかし、だからと言って、「イスラーム対 NGO」という対立軸を設定するわけにはいかない。なぜならば、基本的には、NGO のスタッフもムスリムであり、彼らが提供するサービスの受益者もムスリムであるからである。ヒントとなる例を挙げると、カラーチーのスラムに学校を作り、授業料をとらずに運営する NGO がある。そのリーダーに「あなたのこの数十年にわたる活動は、イスラームの善行という概念で説明できると思うのですが、どうでしょう？」と聞いてみた。する

と、それまでに何回も会って、イスラーム的な話などまったく出ていなかったのに、「たしかにそうだ」という答えが、思慮深い表情とともに返ってきた。さらに学校の名前をつける時には、イスラーム学に通じた友人の知恵を借り、クルアーンの一節から引用したこともわかった。ムスリムがムスリムを助けているのに、イスラーム的な価値観がそこに反映されることはないという、現実離れた図式を作り出すことのないよう、調査においては注意を払っていく必要性が見えてくる。

最後に、異文化理解の観点から考えてみたい。ムスリムと私たちはどのような関係を結んでいくことになるのだろうか。今回、ムスリム社会において、堅実に社会奉仕に取り組む団体の事例を確認することができた。さらに、その種の取り組みが国際社会を舞台とするものへと広がっていることも見た。とりわけ、キムセ・ヨク・ムの事例からは、災害に対する支援活動が、異なる地域の集団、異なる信念や価値観をもつ人々を、ドラスティックに接近させる媒介となることを、日本人は実際に経験した。そして、イスラーム的な価値観を報じる人々と、私たちの間の相互支援は、今後も盛んになるだろうと想定される（話がイスラーム圏にとどまらないことはもちろんであるが、論文の趣旨としてムスリムに限定している）。日本とトルコ、あるいはパキスタン、インドネシアといった国々の NGO が「ともに支えあって生きる時代」を創り出していく段階に入ったと言えるだろう。

まず、これまで以上に、私たちにはイスラームの基本的な価値観を深く理解することが求められる。と同時に、日本的な関係性の表現—この場合には「恩返し」—の有効性も検討していきたい。新聞記事を一概に誤りだとするのではなく、我々が取り結ぶ関係を考えるうえでのヒントとするのである。たしかに、はムダやキムセ・ヨク・ムの信念—人を助けることを通して、神に奉仕する—とは異なるもので

ある。しかしながら、運動の精神的柱であるギュレン自身が「これまでトルコを助けてくれた日本を支援しよう」との趣旨で、トルコ国内での義捐金キャンペーンへの広範な参加を促している。トルコにも恩返しにあたる価値観は存在するし、おそらくどこの社会に行っても存在するだろう。基本となる善行／報奨という宗教的価値観、中核的な信念としての「奉仕」はそのままに、支援という行為に対する解釈が、多様かつ柔軟に開かれていく可能性を探ってみたい。ムスリムとの共生の拠り所となる価値観を、異文化の交流という観点も踏まえて、今後とも検討しつづけていかななくてはならない。

#### <注>

- (1) この支援チームは、以下の団体により構成されていた。バハールエデュケーション（東京、仙台、名古屋、大阪、岡山）、ホライズン・ジャパンインターナショナルスクール（横浜、東京）、トルコ文化センター（東京、仙台、名古屋、大阪、岡山）、大阪トルコ日本協会、日本トルコ文化交流会（NITTOKAI）、名古屋日本トルコ協会（NTJA）。支援チームはトルコ航空、在日トルコ大使館、さらにトルコ国内のビジネスマンとも協力し、被災地の子供たちをトルコに招待するなどの活動も行った。

#### <引用文献>

- Hamdard Foundation Pakistan  
n. d. *Hamdard Foundation Pakistan-Twenty-Five Years of Service 1954-1979*, Karachi: Hamdard Foundation Pakistan.
- Razack, Abdul  
1964 *Hamdard Wakf-Unique Experiments in Social Economics*, Delhi: Hamdard Wakf Laboratories.
- Said, Mohammed  
n. d. "Waqf al-Islami-An Introduction" in *International Seminar on The Place of Waqf in Islam*, Karachi: Hamdard Foundation Pakistan.

2003 English Version of The Waqf Deed,  
Karachi.

河北新報

2011「トルコの有志 友好の味提供—宮城・山  
元で炊き出し—」, 4月14日朝刊

ダニシマズ・イディリス

2012「東日本大震災と在日トルコ人による支援—  
被災時に強まる両国民の絆」大村幸弘・永田雄  
三・内藤正典編『トルコを知るための53章』明  
石書店, 342-352頁。

日本トルコ文化交流会

n. d.「石巻市大瓜井内区長・井内西部区長より  
感謝状を拝受」

[http://www.nittokai.org/media/index18\\_5.html](http://www.nittokai.org/media/index18_5.html)

2012年10月18日アクセス。

子島進

2002a『イスラームと開発—カラーコラムにおけ  
るイスマール派の変容』ナカニシヤ出版。

2002b「グローバル化とイスラーム：イスラーム  
的 NGO の動態から」津田幸男・関根久雄編著  
『グローバル・コミュニケーション論—対立から  
対話へ』ナカニシヤ出版, 131-144頁。

2004「パキスタンの嗜好品とイスラーム的慈善  
制度」高田公理・栗田靖之・CDI編『嗜好品の  
文化人類学』講談社, 208-216頁。

2011「パキスタンにおけるムスリムの NGO —ハ  
ムダルドの理念と活動」『南アジアの文化と社会  
を読み解く』慶応義塾大学東アジア研究所, 307-  
330頁。

細谷幸子

2011『イスラームと慈善活動—イランにおける  
入浴介助ボランティアの語りから』ナカニシヤ  
出版。

毎日新聞

2011「感謝の気持ち行動に—在日トルコ人宮城  
で炊き出し—」4月27日朝刊。

(ダニシマズ・イディリス 客員研究員・

同志社大学グローバルスタディーズ研究科助教)